

俺はアラフォーの独身サラリーマンのオッサンだ。
ある日、会社の帰りに交通事故にあってしまい、
大けがを負って救急車で病院に運び込まれた。
直後に、命に関わるから緊急手術になると言われ、
手術室に運び込まれ、全身麻酔をかけられ…。

「俺」「ん…俺、一体どうなって…」

俺は目が覚めたのだが、そこは病室ではなく、事務所のような場所だった。
それにこの格好は、病人の着ている服にしては、妙にヒラヒラとしている。
髪も妙に長く伸びて、色素が抜けたのか金髪になっているし、
そもそも体つきがおかしくないか？俺は恐る恐る部屋にある鏡を見た。



「俺」「なんだこの金髪の美少女は…って、これ鏡だから…」
「コレ、俺かあ!? 俺が美少女!?!」

目を疑った俺は、試しに色々と体を動かした。
鏡に映る美少女は俺と寸分違わぬ動きをする。

「俺」「ど、どうなってんだ!?!」

「医師」「意識が戻ったようだね。どうだね美少女の体は」

俺が狼狽していると、白衣を着た男性が入ってきた。

こいつが俺の主治医なのか? とにかくこれがどういう状況なのか、

俺が男に説明を求めると、男は「ニコニコ」とした表情で説明を始めた。



俺の元の体は損壊が激しく、このままでは死を免れなかった事と、俺が生き残るには、実験で作られたこの体に、脳を移し替える事しか無かった事を説明された。言われてみれば、病院に運ばれた際、朦朧とした意識で、何か書類にサインした気がする。

【俺】「話は分かったが……」

俺、この体でこの先どうすりゃいいんだ？」

【医師】「ラヒツ：TS美少女のやる事なんて「っ」しかないだろうっ」

俺がそうボツリと独白すると、医師はニチャアと気持ちの悪い笑みを浮かべる。これは悪い事を考えている顔だ。俺は背筋に寒気が走った。



【医師】「戸籍も失った君は、これからAV女優として生きるんだよ」
【俺】「え、AV女優！ できるかそんな事！」

いきなりな事を言い出した医師に、俺は大声で怒鳴った。自分でも可愛い声だと思った。

【医師】「拒絶反応は知っているかな？」

その肉体に移植された君の脳が、肉体から異物と認識され免疫から攻撃されるんだ。その苦しみは想像を絶するだろう。拒絶反応を抑える薬は高価なんだよ。意味はわかるね？」

戸籍も金も何もない俺に、選択する権利は残されていなかったようだ。



「俺」くそっ…わかったよ…やればいいんだろやれば…」

「医師」安心したまえ。その肉体は性行為用に作った特製品だ。性行為に対して苦痛を感じる事は無いし、快楽は倍増されているからね」

要するに今の俺の肉体は、

男とのセックスに特化した体だから安心というわけだ。

しかし、女の体とは言え、俺が男とセックスするなんて、正直気持ち悪い。

そして、女の快楽は男の比では無いという話も聞いたことがある。

こんな体で男とセックスなんてしたら、俺はどうなってしまうのか。

俺は恐怖と不安が入り混じる中、医師の指示を待った。



【医師】

「フヒッ…実はもう撮影の準備は出来ている。
君のデビュー作「発目は、TS少女が
変態医師を足コキ逆レ処女喪失だ」

医師は服を脱ぎ、勃起したペニスを露出させた。

【俺】

「うん…この匂い…」

何日か風呂に入っていないのだろうか、

医師のペニスからは強烈なチンカス臭が漂ってくる。

不快なはずのその匂いなのだが、この肉体の性質なのか、

俺は下腹部がキーンと疼くのを感じていた。



俺は医師の指示に従い、おそろおそろカメラへと近づく。

【医師】「ほら、まずは可愛い足裏を見せてくれたまえ」

足裏を見せてくれたまえ

【俺】「この変態め…」

そう言いつつ、俺はストッキングに包まれた足裏をカメラへと向けた。



直後に医師は、俺の足裏の匂いを思い切り吸い込んだ。

【医師】

「美少女のタイツでムレた
足裏の匂い、最高だ！」

【俺】

「ど、こいつ……やめっ……」

足裏に吐息が当たるだけで、異様にくすぐったい。この体はかなり感度がいいようだ。



【医師】「さて、それでは踏んでもらおうか？」

【俺】「うぐっ…気持ち悪い…」

この体が小柄だからか、妙に巨大に見える
医師のペニスを、ぐりぐりと踏みつける。
その都度ペニスはビクンと反応し、俺の足裏にくすぐったさと、若干の気持ち良さを与えてきた。



【医師】「ラビッツ…君も興奮して来たようだね」

【俺】「だ、誰が興奮なんて…!」

俺はそう言われて、股間が濡れて、

愛液がパンストから染み出している事に気づいた。

俺は本当に男を足コキして興奮しているのか？

俺は変態になってしまったのか？



【医師】「で、出るぞっ……うおおっ！」

《ひゅるるるるっ！》

【俺】「う、うわっ！？ ちよっ！」

いきなり目の前で射精され、俺は悲鳴を上げた。
濃厚な精液が俺の足裏に浴びせかけられるのを感じ、俺は確かに興奮している事を感じていた。



【医師】「ふう、出た出た！」

【俺】「うう…き、気持ち悪い…」

言葉とは裏腹に、たつぷりと精液で汚された足裏の感触と、部屋中に充満する精液の匂いに、俺の体はさらに欲情し、興奮している事を感じていた。



【医師】「ではいよいよ本番だ。まずはオマン」とおっぱいを見せなさい」
【俺】「うう…と、これでいいのか…？」

言われるままに胸と股間を露出させると、俺は本当に女の体になってしまった事を実感させられる。

【医師】「やはり私の作った肉体は最高の美少女だな」

俺ではなく体が褒められているだけなのだが、美少女と言われて悪い気はしない。精液の匂いと、股間と乳首に当たる外気と相まって、俺はどんどん興奮していった。



【医師】「もう充分にほぐれてるはずだから、そのまま挿入するんだ」

【俺】「うう…お、俺が…こんなオッサンなんかと…」

男とセックスする羽目になるなんて…そんな嫌悪感を、興奮と欲情で無理やりごまかしながら、腰を沈める。

『ずいゆっ…ブチッ…』

【俺】「ひっ…うぐっ…い、痛っ…」

ブチブチという肉の避ける痛みが伝わってくる。俺はコレが処女喪失かと、他人事のように感じていた。



【医師】「どうだ？ 痛いけど気持ちがいいだろう？ ほら腰を動かさないよ」

【俺】「うう…お、お前っ…覚えておけよう…この変態っ…」

俺は悪態をつきながらも、この体での生存を維持するため、
そして興奮と好奇心を満たすため、腰を動かした。

《ぬちゅっ！ ぐちゅっ！》

【俺】「ひっ…!? な、なんだこの感覚っ…あああああっっっっ！」

感覚が高すぎて思わず声が漏れる。男の時には感じた事がない、異様なまでの快楽が、脳天を突き抜ける。



【医師】「ぎゅうぎゅうに締め付けて来るぞ……！ 流石、私の作った肉体は名器だなっ！」
【俺】「うぐっ……！ ひっ……！ こ、これ、腰止まらないっ……！」

男相手にセックスして、挙句気持ちよくなってしまうなんて情けない。
そんな考えも一瞬で消し飛ぶくらい、気持ちがいい。

《ぬちゅっ！ ぐちゅっ！》

【医師】「ほら、もうそろそろ出るぞー！」

俺の子宮の中に精液を吐き出されるのか。射精されたらどうなるんだろうか。俺は膣を締め付けた。



《びゅるっ…びゅるるるるっっっ》

【俺】「びぎっ!?! ああああああっっっっ!」

子宮口にめり込んだペニスから、子宮内部に直接精液が吐き出された。
生ぬるいドロドロの精液が流れ込む感触に、俺は絶頂した。

【俺】「あっ♡ ああああっっっ♡」

【医師】「どうだ、気持ちいいだろう?」

俺は無我夢中になり、医師のペニスをぎゅうぎゅうに締め付け、その精液を全て搾り取っていった。



【俺】『はあっ……♡ はあっ……♡』

それから絶頂の余韻が収まるまで、俺は医師とつながったまま、精液と女の絶頂の感触をたっぷりと味わわれ、その感覚をしっかりと脳髓に覚えこまされてしまった。

【医師】『よし、今日の撮影はこれで終了だ。おつかれさん』

医師がペニスを引き抜くと、俺の股間の割れ目からは大量の精液があふれ出した。俺はあふれ出した精液の水たまりを呆然と眺めながら、自分の身に起きた事を反芻していた。



翌日。俺は昨日とは別の衣装を用意され、それに着替えた。
女子学生風の服に着替えた俺は、教室の
セツトが置かれたスタジオへ案内された。

【医師】

「どうかな？ 自分が

可愛い女子学生になった感想は。

ほら、その恰好で足を開いて、

オマンコを広げてみなさい…フヒッ…」

【俺】「…この変態め…下着くらい用意しとけよ…」

目の前に大きな鏡を用意され、その前でオマンコを広げる。

鏡には、清楚そうな女子学生が、綺麗なピンク色のオマンコを広げている姿が映し出される。

これが俺だというのだから信じられない。俺は自分の姿を見て、ドキドキと興奮し始めていた。



【医師】「自分の姿を見て、ずいぶん興奮してるようだねえ」

【俺】「だ、誰がつ……このっ……」

【医師】「ほら、オナニーしてみなさい」

医師に言われて反発するが、俺も男だ。
こんな美少女のくばあを見て興奮しないはずがない。
俺は悔しさを感じながらも、医師の命令にしたがい、
そのピンク色のオマシコを指でいじりまわした。

【俺】「ひっ……！ んんっ……！」

昨日の挿入とは違うタイプの気持ち良さに、俺は小さく声を上げる。
自分の可愛い喘ぎ声と、悩ましい表情を映し出す鏡を見てみると、指が止まらなくなってしまう。



【俺】「んっ…ひっ…あああ…っ…」

【医師】「ラビビ…オナニで軽く
絶頂してしまったようだね？」

俺は無我夢中でオマンコをいじり続け、
そして医師とカメラの目の前で、無様にも絶頂した。
愛液を垂れ流しながら、ビクンビクンと体を震わせ、
ひくひくと男を求めるオマンコを見せつける。

【俺】「はあっ…♡ はあっ…♡」

【医師】「それじゃあ今度はこっちの番だね」

医師はそう言うのとペニスを露出させ、昨日と同様、俺の足裏へとこすりつけ始めた。



「俺」「ま、また足でやるのかよ…好きだなアంతາも…」

「医師」「ラビビ…女子校生のニーツで足コキは男の夢だからねえ」

俺も元男だから、医師の気持ちはわかる。
確かにこんな美少女女子校生のニーツックスで
ペニスをしごかれるのはご褒美だ。

「俺」「…これが昨日、俺に突き刺さっていたのか…」

改めて自分の処女を奪ったペニスをまじまじと見る。

こんな巨大でグロテスクな物が、こんな美少女の
オマシコに突き刺さっていたのかと考えると、妙な気分になると同時に、子宮が疼いてくる。



【医師】

「足裏の柔らかさとニートソックスの
すべすべ感がたまらん…も、もう…」

【俺】

「ちよ、待てっ…あっ！」

《びゅるっ！

びゅるるるっ！》

俺が足裏でしごいていたペニスから、
勢いよく精液が吐き出された。

【俺】

「うっ…っ、この匂い…」

たちまち周囲には精液の濃い匂いが漂いはじめ、
俺の鼻孔から脳へと達し、肉体を発情させていく。



【医師】「はあ…はあ…気持ちよかったよ」

【俺】「うう…また靴下が精液で
どろどろに…気持ち悪い…」

足裏にべっとりとつけられた精液は、
すぐに靴下へとしみ込んできて、足指に直接
そのぬるぬるとした感触が伝わってくる。
不快でしかないはずの感触なのに、俺の体は律儀に
発情し、愛液をたっぷりと溢れさせてくれた。

【医師】「では次はオマンコでしこいて貰おうかな」

医師はそう言って、昨日と同じように床へと寝転がった。



俺は腰をかがめて、目の前でそり立つ医師のペニスを見つめる。
俺は男なのに、こんな物を欲しがるなんて、どう考えてもおかしい。
理性では拒否してても、本能ではあらがえない。

【医師】「ほら、はやくしたまえ」

【俺】「わ、わかってるよ…」

医師に促されるまま、俺は再び、そのペニスを挿入すべく、医師に跨った。



《スブツ…ずにはうつつ…》

「俺」「ひっ…！ んんっ…！」

「医師」「もう痛みは無いようだね、フヒッ…」

医師が言う通り、昨日のような痛みが無い。

それどころか、膣がペニスになじんだからか、

心地よさしか感ず、もっと気持ちよくなりたいという感情に支配された。

こんな変態男のペニスが突き刺さってるのに…。俺は悔しかったが、腰を振らずにはいらなかった。



《ぐちゅっ！ めちゅっ！ どちゅっ！》

【俺】「びゅ…… あっ…… ああああっ……！」

【医師】「うおっ……流石に激しいピストンだねえ……」

この体は非常に身軽で、

濃しを上下させるといふ動きすら、簡単にできる。

俺はもう何も考えず、ただ気持ちよくなるためだけに、

ひたすら医師のペニスを締め付け、腰を激しく動かし、快楽を引き出していった。



《ぬぷっ！ぬちゅっ！じゅぷっ！》

【俺】「ひっ……！お、奥が……？これ、子宮に……？」
【医師】「激しくしたから子宮に入ったんだろうな、フヒッ」

昨日よりもさらに奥深く、子宮の辺りまで

ペニスが突き刺さる感触が伝わってきた。

本来なら痛みしか感じないはずの子宮内部すら、この体は性感帯に作り替えられている。

俺は子宮内部をかき回すように、ひたすら腰を前後左右上下へと振り乱した。



【医師】「そ、そんなに動いたら…も、もう我慢が…うっ…」
《びゅるるるるるるっっっっ！……！》
【俺】「びゅっ♡ ああああああっっっ♡♡♡♡」

子宮の中に思い切り挿入された状態で、
昨日よりもさらに大量の精液を射精されてしまった。
卵管にまで流れ込んでくるかと思う勢いで、子宮を満たしていく精液の感触に、
俺は頭の中が真っ白になるほどの快楽を叩きつけられ、絶頂してしまった。



俺はまるで正気を失ったかのように、絶頂の快楽にとりつかれ、
ひたすらペニスを締め付け、精液を絞りつくした。
絶頂の余韻が収まった頃、俺はゆっくりとペニスを引き抜いた。

《じほろっ……びちゃっ》

鏡には、美少女が割れ目から精液をたらし、水たまりを作っている姿が映し出されている。
俺は、あんなに乱れた事を少し後悔しつつも、この快楽に強い満足感を味わっていた。



「俺」 「体育倉庫で体操服に着替えるって…またマニアックな…。あのマッドサイエンティストめ…。でも、下がブルマとはちゃんと分かってるな…って、何言ってるんだ俺は！」

翌日。

俺は再び撮影場所を変更し、着替えを命じられた。

今日は体操服に着替えて体育倉庫で撮影だそう。

俺は医師が来る前に着替えを終わらせようと、

小さめのブルマを、ぐいぐいとお尻に押し込むように履いていく。

ブルマのすべすべした生地が伸びて、ぴっちりとお尻に食い込んで、中々に着心地がいい。

体操服も乳首にこすれて中々気持ちがいい。女っていつもこんな感じなんだろうか。



【医師】「君もずいぶん、女の子の体が気に入ってきたようだね。TSう子はそうでなければ」
【俺】「だ、誰が女の体なんか気に入るかよ！ 酷い事ばかりじゃがって……！」

突然入ってきた医師の言葉に凶星をつかれ、思わず悪態をついた。

【医師】「ではまずは縄跳びでもしてもらおうか」
【俺】「な、縄跳び……？ ま、まあ構わないけど……」

医師は長いロープの先端をカラーコーンに結びつけ、その反対側を持った。
これを回すから飛べという事らしい。
俺はおっぱいとお尻の揺れる感覚を味わいつつ飛んだ。



最初は普通に飛んでいたが、だんだん縄の回転が速くなってきて、俺は飛びきれなくなってきた。そして縄を踏んづけた瞬間、医師は思い切り縄を引っ張り上げて、俺の股間に食い込ませてきた。

【医師】「縄跳びに失敗したので罰ゲームだ」

【俺】「ちよっ！ 縄が股間に食い込んでるから！」

【医師】「ほらほら、逃げれるなら逃げてみたまえよ」

俺は縄をまたいで逃げようとすると、そのたびに医師が縄を動かし、逃げられないようにする。縄はブルマが食い込んだ俺の割れ目にこそすれあい、股間に刺激を与えられてしまう。



【俺】「はあっ…はあっ…も、もうやめっ…これ以上は…ひっ…」

ロープだけだったら痛いだけかもしれないが、厚手のびっちりしたブルマが、程よく気持ちのいい感触にしてくれる。俺は思わず甘い声を上げる。

【医師】「ブルマで吸い取り切れないくらいに

濡れさせるとは、もう準備万端のようだね」

【俺】「う…だ、誰が準備万端…ひっ！ も、もう動かすなっ…」

医師はたっぷりと俺の股間をイジメてから、ロープを手放し、俺の下腹部に顔を近づけた。



医師はそのまま、俺の股の下に顔を潜り込ませ、俺の股間に顔を埋もれさせてきた。

【俺】「ひいっ!? お、お前っ! なんで俺の股の下に潜り込んでっ!」

【医師】「これだけ濡れたブルマを堪能しないなんて、勿体ないだろう?」

【俺】「やめっ…動くなっ…今、敏感になっ…ひっ!」

ロープとは違う、医師の顔の感触が、ブルマ越しに伝わる。

鼻の凹凸や、医師の唇や舌がもそもそと動く感覚まで伝わると、俺は思わず声を漏らしてしまう。

俺が気持ちよくなっている事が、医師の顔面に伝わってしまう事が、何より俺を辱め興奮させていた。



【俺】「も、もうどいてくれ……でないと、俺……ひいっ……！ んんっ……！」
【医師】「……おお？ このビクンビクンとした反応……俺の顔面の上でイッたね？」

俺は医師の顔面にオマンコをこすりつけ、イッてしまった。

【俺】「はあっ……はあっ……」

【医師】「この濃厚な尻とマンコと愛液の匂い……」

随分興奮してるようだね。それでは次は、わかっているね？」

医師の言う通り、俺はさらに興奮し発情していた。俺は医師に促されるまま、医師の股間へと跨った。

俺は胸を露出させ、ブルマをずらし、医師のペニスを飲み込んだ。

《ぐちゅっ…ぬちゅううううっ…》

「俺」「ひっ…んっ…は、入ったぞっ…」

「医師」「ラビッ…君も随分、女の体に慣れてきたねえ」

医師は俺を見上げながらニタニタと笑みを浮かべる。

こんな美少女が、体操服ブルマ姿で挿入してくれてるのだから、

そりゃどんな男でもにやけた顔になるという物だろう。

俺はそのままゆっくりと根元までペニスを飲み込んだ後、

少しずつ腰を上下へと動かしていく。



『すちゅっ！どちゅっ！ぬちゅっ！』

【俺】「ひゅっ……あっ！んんっ！」

【医師】「おっ……いいぞ！もっと締め付けてくれ！」

俺は腰を思い切り上下に動かし、医師のペニスをしごいていく。

【医師】「ほら、もっとカメラに映るように……！」

【俺】「注文の多い奴だな……ほら、これでいい……ひゅっ！」

両足を大きく広げて体をそらせると、尿道の裏側あたりにペニスのカリがひつかかる。その瞬間、俺は小さく悲鳴を上げた。



「俺」「な、なんだ今の… ひぐっ！ ま、またっ… ああっ—」

「医師」「Gスポットっていう所に当たったのだろう。ほら、もっと奥まで入れてかき回しなさい」

医師のペニスで俺の性感帯が開発されていく。腹が立つが逆らえない。

「俺」「ひぐっ！ あっ…！ ひあああっ—」

ペニスは俺の子宮に入り込み、子宮口を出たり入ったりを繰り返しながら、Gスポットを的確にとすりあげていく。

俺はその感覚で再び頭が真っ白になり、絶頂へと導かれていった。



【医師】「ほら、そろそろ出すぞっ……！ 子宮で受け止めなさい！」
《びゅるっ……！ どびゅるるるるっっっ！》
【俺】「びゅっ♡ あっ♡ ひあああああっっ♡」

俺が絶頂に達すると同時に、子宮めがけて大量の精液が流れ込んだ。

【俺】「あっ♡ ああっ……♡ 精液、しみ込んでくるっ♡」

性感帯を執拗に攻められた後の絶頂と、その状態での子宮内射精は、今までの中で一番気持ちよく感じた。
俺は快楽で顔をだらしなく歪めながら、その精液を子宮で受け止めていった。



翌日。俺はスクール水着に着替えさせられ、パイプを渡され、プールサイドへと案内された。

【医師】「そうそう、そうやってパイプを挿入するんだ」

【俺】「…このプール、外から見えるんじゃないのか…？」

こんな人目につくかもしれない場所で、オナニー撮影とか正気がよ…」

外の道路から通行する車の音が聞こえる中、俺はオマシコへパイプをあてがった。



【医師】「それではバイブのスイッチを入れたまえ」
【俺】「わ、わかったよ…。あれ…?」

バイブは反応しなかった。

【医師】「…あれ? 壊れてるのかな? 電池は新しいはずなんだが…」

【俺】「ははっ…! それじゃあこの撮影は終了だな!」

折角用意されたバイブも、動かなければただの棒切れた。

俺は今までのウサを晴らすかのごとく、医師を小馬鹿にして笑ってやった。



【医師】「動かないなら仕方ない、自分で動かすんだ、さあ早く」

【俺】「うぐっ…そんなに甘くは無かったか…」

俺はバイブを握る手に力を込めた。

《ぐちゅっ！どちゅっ！ぬちゅっ！》

【俺】「びっ！ううっ！あああああうっうっ！」

俺は無意識にバイブを握りしめ、子宮口とGスポットめがけて突き上げる。

すっかりと快楽を教え込まされた事に気づいて不快になるが、快楽には逆らう事が出来なかった。



【医師】「そんな所で良いだろう。中々激しいパイプオナニーだったよ」
【俺】「うぐっ…はあっ…はあっ…」

俺はパイプを握る手の力を緩めた。

パイプですっかりほぐされ、軽くイッてしまった俺のオマシコからは、

男のチンポが欲しいと言わんばかりに、大量の愛液があふれ出していた。

あんなに乱暴にかき回しても痛くないどころか、快楽で絶頂するなんて、

この体は本当に性処理のためだけに作られた性欲モンスターなのだと実感する。

そして恒例のごとく、俺はまた医師の相手をするように言いつけられるのだった。



【俺】「うぐっ…はあっ…はあっ…」

俺は羽織っていた上着を脱いで、胸をはだけさせ、水着の股間をずらす。
オマンコからは愛液が意図を引き、床にポタリと落ちていく。

【医師】「いい恰好だねえ。それでは挿入してもらおうか」

俺は医師に促されるまま、いつも通り医師の体の上に跨った。



「俺」「んっ……うっ……」
《ヌチュツ……ズブブブツ……》
「医師」「いつもより締め付けが強いねえ。屋外はそんなに興奮するかい？」
「俺」「だ、誰が興奮してなんかっ……！」

俺は思わず言い返すが、実際、今日は屋外という事で、妙にドキドキする。
もしこんな美少女の所を、直接誰かに見られてしまったら……。
AV撮影されてる時点で今更なのだが、実際に見られてるかもしれないというのは、結構スリルがある。



【医師】「ほらほら、今日は射精すれば終わりにしてやるから、頑張るんだぞ」
【俺】「わ、わかった…さっさと出せよう…んっ…」

その言葉を聞いて、俺は獣のような恰好で、腰を必死に動かす。

《ぐちゅっ！ ぐちゅっ！ ぐちゅっ！》

もし知らない人が見たら、俺が医師を犯してるように見えるんだろうな。そう考えつつ、腰を振った。



俺は小柄な体で必死にペニスをくわえこみ、子宮口で鬼頭をくわえこみ、しごいた。

【俺】「ひゅ……ん……あああ……」
《ぬぶっ！　じゅぶっ！　ぬほんっ！》

【医師】「今日は二段と激しいね……そろそろおわるぞ……」

そういつて医師は腰の動きを固めて、子宮にペニスを密着させる。俺は射精に備えて身構えた。



『びゅるっ！ びゅるるっ！ どびゅるるるるるっ！』
『俺』『びんっ♡ ひうっ…あああああうっ♡♡♡♡』

大量の精液が子宮内部に吐き出されると同時に、俺は絶頂した。

子宮内部まで性感帯として作られたからか、精液が流れ込んでくるだけで、信じられないくらいの快楽に襲われ、頭の中身が真っ白になる。悔しいが、こんな快楽は男では味わう事が出来ない。俺は次第に快楽の虜になりつつあるようだった。



「俺」「……うんっ♡……はあっ♡……はあっ♡」
《うほ……うほ……うほ……》

俺がペニスを引き抜くと、大量の精液があふれ出してきた。

約束通り、今日の撮影はこれで終了となった。しかし俺は物足りなさを感じていた。

こんな事が毎日続いたら、俺はいつまで耐えられるんだろうか。いつか女である事を受け入れ、自ら男を求めるのだろうか。そしてその日はあまり遠くないのかもしれない。そう感じていた。

終わり

俺はアラフォーの独身引きこもりニートのオッサンだ。
ある日、コンビニに行く際、交通事故にあい、
大けがを負って救急車で病院に運び込まれた。
直後に、命に関わるから緊急手術になると言われ、
手術室に運び込まれ、全身麻酔をかけられ…。

「俺」「ん…俺、一体どうなって…」

俺は目が覚めたのだが、そこは病室ではなく、事務所のような場所だった。
それにこの格好は、病人の着ている服にしては、妙にヒラヒラとしている。
髪も妙に長く伸びて、色素が抜けたのか金髪になっているし、
そもそも体つきがおかしくないか？俺は恐る恐る部屋にある鏡を見た。



「俺」「なんだこの金髪の美少女は…って、これ鏡だから…」
「コレ、俺か!? 俺が美少女!?!」

目を疑った俺は、試しに色々と体を動かした。
鏡に映る美少女は俺と寸分違わぬ動きをする。

「俺」「か、可愛い…流石俺…」
「医師」「意識が戻ったようだね。どうだね美少女の体は」

俺が狼狽していると、白衣を着た男性が入ってきた。
こいつが俺の主治医なのか? とにかくこれがどういう状況なのか、
俺が男に説明を求めると、男は「ニコニコ」とした表情で説明を始めた。



俺の元の体は損壊が激しく、このままでは死を免れなかった事と、俺が生き残るには、実験で作られたこの体に、脳を移し替える事しか無かった事を説明された。言われてみれば、病院に運ばれた際、朦朧とした意識で、何か書類にサインした気がする。

【俺】「なるほど、そういう事が…フヒッ」

【医師】「君には新しい戸籍が与えられ、女子○学生として学校に通ってもらおう事になる。お金は国から出るので安心したまえ」

医師は色々な手続きを全部やってくれたらしい。本当に至れり尽くせりだな。俺ははやる気持ちを抑えて、とりあえず医師の説明を聞いた。



「医師」「そういう事だから、君はこの少女として人生をやり直して欲しい」
「俺」「わかりました。質問いいですか？」

「応体の事もいろいろ聞いてみたが、性別が変わった事以外は特に問題は無いそうだ。」

ただ、男性の脳を移植したからか、性的機能に二部不具合が出ているようだった。

肉体年齢的に、本来なら来ているはずの生理が来ていないようだ。

おそらく、数年もすれば脳が体になじんで生理も来るだろう、との事だ。

つまりそれまでは、生で中出し放題って事が……ますますムラムラしてきた。

俺は股間にシワリと湿り気を帯びているのを感じつつ、次の質問をした。



「俺」「…で、先生はなんでこんな美少女の体なんて作ってたんですか？」
「医師」「そ、それはだね…遺伝子の協力者が…」

俺が質問をすると、医師は狼狽えるように、
言い訳じみた回答を並べ立て始めた。

俺は、ずっと医師の視線が、
俺の顔や胸元、ヒラヒラさせているスカートの見える太ももに、
執拗に注がれている事と、軽く前かがみになっている事に気づいていた。
今後この体で好き勝手生きていくなら、医者の協力があるに越した事は無い。

「俺」「…それじゃ、二つ実験したい事があるんで、付き合ってもらえますか？」



【医師】「え？ 実験って何をする気だね？」

【俺】「セックスしたらどうなるかって思ってる♡」

俺はそう言っで、さらにスカートをヒラヒラさせ、
医師に太ももを見せつけてやった。

【医師】「せ、セックス！？」

【俺】「わざわざこんな体作るくらいなんだから、こういう少女が
お好みなんですよね？ じゃあ丁度いいじゃないですか♡
俺も女の体のセックスがどんなのか気になりますし♡」

俺はそう言っで、狼狽える医師を押し倒し、ペニスを露出させた。



【医師】「ちよ、ちよっと待ちたまえ！ 私はい！」

【俺】「いやいや、こんな美少女に
こんな服装させて、完全に
先生の趣味ですよねこれ？」

そう言うって俺が片足を大きく上げると、
医師の目は俺のオマシにぐき付けになった。



【俺】「それに、ずっと太もも見て前かがみになってたの、知ってるんですよ？」

【医師】「そ、それはその…」

【俺】「ほらほら、どうですか？」

弁解する医師の顔に俺は足裏を引っ付けてやると、

明らかに呼吸が荒くなり、ペニスがビクンと大きく反応した。こいつ完全に足フェチだ。



【俺】「さーでこのオチンチン、どうしてこれなのかな♡」

【医師】「うぐっ……や、やめっ……!」

この体が小柄だからか、妙に巨大に見える
医師のペニスを、ぐりぐりと踏みつける。

その都度ペニスはビクンと反応し、俺の足裏にくすぐったさと、若干の気持ち良さを与えてきた。



「俺」「口では否定してても、オチンチンは正直なようですな♡」

医師はペニスをギンギンに勃起させ、俺の足裏の刺激に必死に耐えている。こんな美少女に、パンスト越しに割れ目を見せつけられながら、パンスト足裏で足コキされるんだから、そりゃ気持ちいいだろうな。



【医師】「も、もう我慢がっ……おおおっ！」

《ひゅるるるるっ！》

【俺】「う、うわっ！？ ちよっ！」

いきなり射精され、俺は意表を付かれ悲鳴を上げる。
濃厚な精液が俺の足裏に浴びせかけられるのを感じ、俺の体がこれを欲している事を感じていた。



【医師】「う……あ……す、すまないっ……」

【俺】「なんだかんだ言った割には
たつぷりと出しましたね♥
そんなに気持ちよかったですか？」

背徳感でうなだれる医師を横目に、俺は自分の体が、我慢できなくなりつつある事に気づいていた。



【俺】「先生ばかり気持ちよくなってるんで、私も気持ち良くして下さいよ♡」
【医師】「どこ、やらめたまえっ!」

俺はそう言っただけで胸と股間を露出させる。感覚としては実感していたが、膨らんだ胸とつるんとした股間を見ると、女である事を実感する。

【俺】「私の体、なんで下着付けてないんですか? 先生の趣味なんですか?」

【医師】「そ、それは…私が着替えさせたわけではないから…その…」

俺がそう言うと、医師は言い訳するために動きを止めた。その瞬間、俺は医師の股間の上に跨った。



俺のこの体は、もう充分興奮して濡れているっほいから、このまま挿入しても大丈夫だろう。
俺はそう考えて、童貞素人丸出しの太雑把さで、医師のペニスを一気に挿入してやった。

《ずいゆっ…ブチッ…》

「俺」「ひっ…！ うぐっ…い、痛っ…」

「医師」「うぐっ！ そ、そりゃいきなりそんな入れ方したら…」

流石にコレは痛かった。ブチブチという肉の避ける痛みが伝わってくる。

俺はが童貞素人丸出しである事を証明した事に、少し恥ずかしさを覚えつつ、股間の痛みを堪能していた。



「俺」くくそう…痛くても動いてりやそのうち慣れるだろ…ひっ！」

俺は悪態をつきながらも、経験が無いなりに頑張って腰を動かした。結構痛い、でも動いているうちに痛み慣れて来たようだった。そして少しずつ、痛みより気持ち良さが大きくなってきた。

《ぬちゅっ！ぐちゅっ！》

「俺」ひっ…！？な、なんだこの感覚っ…あああああっっっ！」

感覚が高すぎて思わず声が漏れる。男の時には感じた事がない、異様なまでの快楽が、脳天を突き抜ける。



【医師】「ぎゅうぎゅうに締め付けて来る……や、やめなさいっ……このままじゃ……」
【俺】「うぐっ……！ ひっ！ こ、これ、腰止まらないっ……！」

何も考えず、本能に身を任せるだけで、勝手に腰が動いてしまう。
これは気持ちがいい。俺は無我夢中で腰を振る。

《ぬちゅっ！ ぐちゅっ！》

【医師】「は、早く抜かないと……中に出っ……っ……！」

俺の子宮の中に精液を吐き出されるのか。射精されたらどうなるんだろうか。俺は膣を締め付けた。



《びゅるっ…びゅるるるるっっっ》

【俺】「びんっ!?! ああああああっっっっ♡♡♡♡♡」

軽く子宮口にめり込んだペニスから、子宮内部に直接精液が吐き出された。生ぬるいドロドロの精液が流れ込む感触に、俺は絶頂した。

【俺】「あっ♡ ああああっっっ♡」

【医師】「びっ…! す、すまないっ…!」

俺は精液の感触の虜となり、ペニスをぎゅうぎゅうに締め付け、その精液を全て搾り取っていった。



【俺】「はあっ……♡ はあっ……♡」

それから絶頂の余韻が収まるまで、俺は医師とつながったまま、精液と女の絶頂の感触をたっぷり味わい、堪能した。女の喜びを、しっかりと脳髓に覚えこまされてしまった。

【俺】「あーあ、こんなにたっぷり出しちゃって♡」

俺はペニスを引き抜くと、股間の割れ目からは大量の精液があふれ出した。俺はあふれ出した精液の水たまりをニヤニヤと眺めながら、自分の身に起きた事を反芻していた。



数日後。俺は用意された制服に身を包み、編入した学校へと通い始めた。
俺はかなりの美少女だから、編入初日から
男子達の注目を集め、人気者になった。

【俺】「ほら、コレが女子のオマンコだぞ♡
お前たち、見た事ないだろう？」
【男子】「こ、これが…女子の…おま…」
【男子】「すげえ…ピンク色で…エッロ…」

俺は早速、発情した男子達を集めて、放課後の
教室でマンコを見せびらかしてやる事にした。
盛りのついた男子どもが、股間を勃起させながら
俺のマンコを食い入るように見る様子は、かなり気分がいいものだ。



【俺】「フヒツ…折角だから、オナニーする所を見せてやる♡」
お前たちもオナニーしていいぞ♡」
【男子】「ほ、本当にっ!?!」

男子達に視姦されて気分を良くした俺は、
さらに男子達に恥ずかしい所を見られたいと思い、
ピンク色のオマンコを指でいじりまわした。

【俺】「ひっ…! んんっ…!」
【男子】「す、すげっ…これが女子のオナニー…!」

昨日の挿入とは違うタイプの気持ち良さに、俺は小さく声を上げる。
自分の可愛い喘ぎ声と、そんな自分に注目する男子を見ていると、
指が止まらなくなってしまう。



【俺】「んっ…♡ ひっ…♡ ああああっ…♡」

【男子】「あっ…今、びくんって…」

【男子】「イッた？ イッたの？」

俺は男子達の目の前で、無様にも絶頂した。

愛液を垂れ流しながら、ビクンビクンと体を震わせ、

ひくひくと男を求めるオマンコを見せつける。

それを見て、男子達も我慢できなくなってきたようだ。

【男子】「お、お願い！ やらせてっっ！」

【俺】「はあっ…♡ はあっ…♡ それじゃ、足でしてやろうか？」

俺はそう言って、男子の二人のペニスを露出させ、そのペニスを足で挟み込んだ。

【俺】「うおっ…お前結構いい体格してるな…相撲部か柔道部か？」

【男子】「ごっちゃんです、相撲部です！
うおっ…ニーソ気持ちいい！」

俺も元男だから、男子の気持ちは良くわかる。
確かにこんな美少女●学生のニーソックス足裏で
ペニスをしごかれるのはご褒美だ。

【俺】「ほらほら♡ どうだ、気持ちいいか？」

改めてペニスをまじまじと見る。相手は違うが、
こんな巨大でグロテスクな物が、こんな美少女の
オマシコに突き刺さっていたのかと考えると、妙な気分になると同時に、子宮が疼いてくる。



【男子】「足裏の柔らかさとニーソックスの
すべすべ感が…も、もう…」
【俺】「ちよ、待てっ…あっ！」

《びゅるっ！ びゅるるるっ！》

俺が足裏でしごいていたペニスから、
勢いよく精液が吐き出された。

【俺】「うっ…いっぱい出しやがって…」

たちまち周囲には精液の濃い匂いが漂いはじめ、
俺の鼻孔から脳へと達し、肉体を発情させていく。



【男子】「はあ…はあ…気持ちよかったっす…」

【俺】「ごいつ…靴下が精液でドロドロに汚れたじゃないか…全く…」

足裏にべっとりとつけられた精液は、すぐに靴下へとしみ込んできて、足指に直接そのぬるぬるとした感触が伝わってくる。不快でしかないはずの感触なのに、俺の体は律儀に発情し、愛液をたっぷりと溢れさせてくれた。

【俺】「仕方ないな、やっぱオマンコを使うしかないか…」

俺はそう言っつて、次の男子に対して、床に寝転がるように命令をした。



【男子】「マシ」を使うしかないって…やらせてくれるって事!？」
【男子】「マジかよ、こんな美少女相手に初体験できるなんて…!」
【男子】「全員やらせてくれるんだよね? ね!？」

【俺】「フフツ♥ 順番に筆下ろししてやるよ!♥」

目の前に横たわる男子のペニスをみつけると、下腹部がキュンと疼く。
俺はオマシ」から愛液を滴らせたまま、その男子の腰の上へと跨った。



《スプツ……ずはゆーうううう……》

「男子」 「ひっ……！ んんっ……！ は、入ったっ！？」

「医師」 「ああ♥ これで童貞卒業だな、おめでとう♥」

目の前で初めて見る生挿入に、男子達は固唾を飲んだ。

俺の方も、昨日のセックスでもう慣れたのか、痛みは無いし、

膣内をペニスで埋め尽くされる満足感と快感だけが強く感じられる。

初めてのセックスに顔をゆがめる男子を後目に、俺はゆっくと腰を動かし始める。



《ぐちゅっ！ ぬちゅっ！ どちらゅっ！》

【男子】「ひっ……!? あっ……! ああああっっ……!」

【俺】「どうだ♥ オナニーより気持ちいいだろっ♥ フニャン!」

俺が腰を動かしていくと、男子は面白いように反応し、

顔をゆがめ、腰をビクンと跳ね上げ、情けない声を漏らす。

俺はそんな男子を気遣う事無く、ただ自分自身が気持ちよくなるためだけに、

ひたすら男子のペニスを締め付け、腰を激しく動かし、快楽を引き出していった。



《ぬぷっ！ぬちゅっ！じゅぷっ！》

「男子」「ひっ……！さ、さらに奥に……突き刺さってる……？」

「俺」「ああ♡多分子宮に入っただんたろうな♡すごいだる♡」

医師からは、俺の脳が馴染んでいない体は、生理が来ていない他に、

子宮口が開きやすくなっている不具合があるという説明も受けた。

そのためか、本来なら痛みしか感じないはずの子宮内部への挿入でも、気持ちよくなってしまう。

俺は子宮内部をかき回すように、ひたすら腰を前後左右上下へと振り乱した。



【男子】「そ、そんなに動いたら…も、もう我慢が…うっ…」
《びゅるるるるるるっっっっ！……！》
【俺】「びゅっ♡ ああああああっっっ♡♡♡♡」

子宮の中に思い切り挿入された状態で、
昨日よりもさらに大量の精液を射精されてしまった。
卵管にまで流れ込んでくるかと思う勢いで、子宮を満たしていく精液の感触に、
俺は頭の中が真っ白になるほどの快楽を叩きつけられ、絶頂してしまった。



俺はまるで正気を失ったかのように、絶頂の快楽にとりつかれ、
ひたすらペニスを締め付け、精液を絞りつくした。
絶頂の余韻が収まった頃、俺はゆっくりとペニスを引き抜いた。

【俺】「はあっ♡ はあっ♡ いっぱい溢れて来たあ…♡」

男子達の目の前で、割れ目から精液をあふれ出し、床に水たまりを作った。
そして俺は、夜までかけて、残り全員の男子達の筆下ろしをする事となった。



翌日。俺は放課後の時間を利用して、また男子達を集める事にした。折角美少女の体に生まれ変わったのだから、色々な服装を堪能してみたい。という事で、用意して来た体操服とブルマに着替える事にした。待ち合わせ場所の体育倉庫で、こっそりと着替えていく。

【俺】「うは…♡ これはエロいなあ…♡」

小さめのブルマを、ぐいぐいとお尻に押し込むように履いていく。ブルマのすべすべした生地が伸びて、ぴゅちりとお尻に食い込んで、中々に着心地がいい。体操服も乳首にこすれて中々気持ちがいい。女っていつもこんな感じなんだろうか。



そして着替えが終わったところ、興奮した男子がぞろぞろと入ってきた。

【男子】「う、うおっ…これブルマって服!? めっちゃエロい!？」

【俺】「そうだろ♥ 昔の女子はみんなコレ着てたんだぞ♥」

俺は見た目は美少女だが中身はおっさんだから、

ブルマの世代を知っている。今の若い奴は可哀そうだ。

さて、今日はどうやって遊ぼうか。いきなりセックスなのも味気ない。

俺はそう考え、長いロープの先端をカラーコーンに結びつけ、その反対側を男子へと渡した。

これで縄跳びをするのだ。俺のおっぱいとお尻や揺れる様子を見せつけて、さらに興奮させてやろう。



最初は普通に飛んでいたが、だんだん縄の回転が速くなってきた。俺は飛びきれなくなってきた。そして縄を踏んづけた瞬間、男子がミスって縄を引っ張り上げると、縄は俺の股間に食い込んだ。

「俺」 「あーあ、失敗失敗……って、縄がすごい所に食い込んでるな♡」

「男子」 「い、いや、わざとじゃ……」

「俺」 「フヒッ♡ そのままこすりあげてみるよ♡」

俺がそう言うと、男子は面白がってロープを引っ張り始めた。

縄はブルマが食い込んだ俺の割れ目にこすれあい、股間に刺激を与えられてしまう。



ロープだけだったら痛いだけかもしれないが、厚手のぴっちりしたブルマが、程よく気持ちのいい感触にしてくれる。俺は思わず甘い声を上げる。

【俺】「はあっ…♡ はあっ…♡ やりたい放題やってくれたなお前…♡」

【男子】「そ、そっちがやれって言ったのに…!」

【俺】「うるさいっ♡ ほら、罰を与えてやる♡」

こうちに来て、俺の尻の辺りに顔を近づける♡」

男子はロープを手放して、少し興奮気味に、俺の下腹部に顔を近づけた。



俺は男子の顔の上に跨り、さっきのロープでしっかりと湿り気を帯びた股間を、男子の顔面に押し付けた。

【男子】「ひいつー!? ぼ、僕の顔にっ…ブルマのお尻がっ…」

【俺】「ほら、お前がやったんだ♥ 責任取って匂い嗅いでいけよ♥」

【男子】「柔らかくて、いい匂いがっ…うあっ…!」

ロープとはまた違う、男子の顔の感触と、男子の吐息と鼻息の感触が、ブルマ越しに伝わる。

鼻の凹凸や、男子の唇や舌がもぞもぞと動く感覚まで伝わると、俺は思わず声を漏らしてしまう。俺が気持ちよくなっている事が、男子の顔面に伝わってしまう事が、さらに俺を興奮させていた。



【男子】「ひっ……ここのままじゃっ……俺我慢がっ……ああああっ！」
《びゅるっ！ びゅるるるるっっ！》

男子は顔面に伝わるオマンコとブルマの感触で射精してしまった。

【男子】「はあっ……はあっ……うっっ……」

【俺】「悪い悪い♡ まさかこんなので射精するとは♡」

でも落ち込むなって♡ 今度はこっちで相手してやるからさ♡」

無様に射精し落ち込む男子を後目に、俺はその男子の股間部分に移動して、腰の上へ跨った。



俺は胸を露出させ、ブルマをずらし、男子のペニスを飲み込んだ。

《ぐちゅっ…ぬちゅっうっうっうっ》

「俺」「ひゅ…んっ♡ は、入ったぞっ♡」

「男子」「うっ…あっ！ あ、ありがとうございますっ…」

男子は俺を見上げて、思わず敬語でお礼を言った。

こんな美少女が、体操服ブルマ姿で挿入してくれてるのだから、

そりゃどんな男子でも、俺が神様みたいに見えるだろう。

俺はそのままゆっくりと根元までペニスを飲み込んだ後、

少しずつ腰を上下へと動かしていく。



《ずちゅっ！どちゅっ！ぬちゅっ！》

【男子】「ひゅー……あう！う、動きが激しくっ……」

【俺】「フヒッ♡ほらほら、どうだ、気持ちいいか？」

俺は腰を思い切り上下に動かし、男子のペニスをしごいていく。

【俺】「そうだ、他の男子は撮影しててもいいぞっ♡♡」

【男子】「えっ！？本当に！やったぜ！」

俺は両足を大きく広げたままピストンし、スマホを構える男子達に、顔も胸も結合部もはつきりと映るように、見せつけてやった。

「俺」「んっ…♡ あっ…♡ よいしょっと♡」
『ずぶっ…ぬぶぶっ…ずぶんっ！』
「男子」「さ、さらに奥に…まさか子宮に入った…？」

俺はペニスを子宮口にあてがい、そのまま子宮内にねじ込んだ。

「俺」「ほらほら♡ 子宮に入れてやったんだから、早く出せ♡」

ペニスは俺の子宮に入り込み、子宮口を出たり入ったりをくり返す。
子宮を鬼頭でかき回される感触は、何度味わっても病みつきになる。
そして精液のしみ込む感触も。俺は精液を搾り取るべく、膣を強く締め付けた。



「男子」「も、もう出ますっ！ ひいつー！！」
《びゅるっ……！ どびゅるるるるっっっ！》
「俺」「あっ……♡ ひあああああっっ♡♡♡♡」

精液が子宮を満たすと同時に、俺も絶頂してしまった。

「俺」「さっき出したばかりなのに、まだこんなに出るのな♡」

俺は子宮で精液を搾り取り、絶頂の快楽に浸る様子を、

男子達の構えるスマホ画面に見せつけてやった。

その後、男子達は順番に交代しつつ、俺相手に撮影とセックスを繰り返した。



翌日の放課後。ブルマでのセックスを撮影させてやった事が嬉しかったようで、今度はバイブオナニーを撮影させてくれと頼まれてしまった。

【俺】「スク水でプールサイドでオナニー撮影とか、お前ら…」

【男子】「スク水似合いすぎてヤバイ！ バイブもエロい！」

【男子】「これ撮影したら一生おがずに使えそうだよなあ…本当にエロい」

男子達が盛り上がっている声を聴きながら、俺はオマンコへバイブをあてがった。



「俺」「それではパイプのスイッチを……って、あれ？」
「男子」「う、動かない……？ なんて……？」

パイプは反応しなかった。

「俺」「……パイプ持ってきたのお前か。電池は入れてきたのか？」

「男子」「あ……」

頑張ってパイプを用意してきたのは評価できるが、「電池が必要だと知らなかったようだ。まあいいこの前まで童貞だったんだから仕方ないよな。俺は手動でオナニーを見せつけてやる事にした。」



「俺」 「ラフッ♡ まあ電池なんかなくても、こうやって動かせば…ひんっ♡」
「ぐちゅっ！ どちゅっ！ めちゅっ！」

俺はパイプを握る手に力を込めた。

「俺」 「ほらほら♡♡ 見とけよ見とけよ♡♡」

「男子」 「うおっ……すげえ激しい……あんなにして痛くないのかっ……」

「男子」 「やべっ……エロすぎる……あんな可愛い顔して、あんなパイプを……」

俺はパイプを握りしめ、子宮口とGスポットめがけて突き上げる様子を、男子達に見せつけてやった。

「俺」「はあっ♡ はあっ♡ と、とりあえずパイプはこんな所でいいか！」

軽く絶頂した俺は、
パイプを握る手の
力を緩めた。

パイプですっかりほぐされ、軽くイッてしまった俺のオマシコからは、

男のチンポが欲しいと言わんばかりに、大量の愛液があふれ出していた。

あんなに乱暴にかき回しても痛くないどころか、快楽で絶頂するなんて、

俺が変態だからという事もあるだろうが、この体がエロに適してるんだらう。

そして、これだけかき回してなお、男のペニスと精液が欲しくなっていたまらなくなっていた。



「俺」「さーで、次はお待ちかねの、お前たちのチンポを咥える番だぞっ♡」

俺は羽織っていた上着を脱いで、胸をはだけさせ、水着の股間をずらす。
オマンコからは愛液が意図を引き、床にポタリと落ちていく。

「男子」「待ってました！ 今日俺からね！ よろしくっー！」

そう言うって男子はプールサイドの床へと寝そべったので、俺はいつも通りその上へと跨った。



俺は慣れた仕草で、男子のガチガチに勃起しているペニスを飲み込んだ。

「俺」「んっ……♡ ううっ……♡」
《ヌチュツ……スラフフツツ》

考えてみれば、今いる場所は屋外だ。柵をよじ登れば、道路側からでも見れてしまう。もしこんな美少女の所を、直接誰かに見られてしまったら……。撮影されてる時点で今更なのだが、実際に見られてるかもしれないというのは、結構スリルがある。



「俺」「ほらほら♡
こんな所だと、いつ誰に見られるか分からないから、急ぐぞ♡」
「男子」「ひっ!?!
い、いつもより激しっ!?!あがあっ!?!」

その言葉を聞いて、俺は獣のような恰好で、腰を必死に動かす。

《ぐちゅっ! ぐちゅっ! ぐちゅっ!》

もし知らない人が見たら、俺が男子を犯してるように見えるんだろうな。そう考えつつ、腰を振った。

俺は小柄な体で必死にペニスをくわえこみ、子宮口で鬼頭をくわえこみ、しごいた。

「俺」「ひゅっ…♡ んっ…♡ ああああっっっ♡♡♡♡♡」
《ぬぶっ！ じゅぶっ！ ぬほんっ！》

「男子」「そ、そんなに動くと…我慢ができなっ…ああああっ！」

そういつて男子は腰の動きを固めて、子宮にペニスを密着させる。俺は射精に備えて身構えた。



『びゅるっ！ びゅるるっ！ どびゅるるるるるっ！』
『俺』『びんっ♡ ひうっ…あああああうっ♡♡♡♡』

大量の精液が子宮内部に吐き出されると同時に、俺は絶頂した。

子宮口をこじ開けた鬼頭の先端から、生ぬるい精液が卵管にまでしみ込んでくる。

子宮内部に流れ込んでくる精液の感触は、何度味わっても気持ちよすぎて、頭の中身が真っ白になる。こんな快楽は男では味わう事が出来ない。俺はすっかり、女の体の快楽の虜になっていた。



【俺】「……♡……はぁ♡……はぁ♡」
《……♡……♡……》

俺がペニスを引き抜くと、大量の精液があふれ出してきた。

一人目が終わると、待っていましたとばかりに、二人目の男子が俺の目の前に横たわった。
ギンギンに勃起しているペニス。こんなに気持ちのいい事が世の中にあるなんて知らなかった。
俺は美少女として生まれ変わった事に幸福感を覚えつつ、毎日のように男子達を犯していった。

終わり